

医学部長時代の背景（1988～1990年）

村山 智

大学の時間は薄れていた

昨年（2009年）の秋に世を去った作家の庄野潤三が若き日に、その師で詩人の伊東静雄を訪ねたら大学へ行くように勧めてくれて「文学をするには閑暇が大切なんです。ひまな時間がたっぷりあるということが大事なんです。大学へ行けばその閑暇がある、それが大事なんです」と言われて九州大学へ進んだと『文学交友録』に書いている。父は既に亡く長兄夫婦の好意に縋っていた身にも拘らず、出来るならば星の綺麗な、海に近い街で医学生生活が送れば有り難いがなどという生意気な、頼り無い思いで何の縁故もない千葉にやってきて、何時の間にかそのまま居すわったような私には、中国の文化大革命以後、ことに1970年前後からの大学の雰囲気は息苦しかった。いわゆる大学紛争、及びそれ以後の大学には「たっぷりとした時間」が許されるはずが無かった。社会の構造の変転、技術の急速な進歩に伴う医学教育の改良、改変は避けることの出来ないものであった。異例に長い教務委員長担当や、外で仰せつかった大学規準協会委員としての責務の当然の帰結として、何度試みてもこれでよしと言う結果に達しない医学部のカリキュラム改変や、入学試験制度の検討の仕事は重荷であった。これまた著しい進歩を遂げはじめた新薬開発の渦を避けることが出来ない薬理学研究という本来の責務は瘦軀に重くのしかかって来た。どうしてその様な運命に落ち込んだのかと回顧もするが、厚生省の新医薬品調査会や薬局法改正の仕事は正に雪崩の如くに押し寄せて、もう大学を辞めて、ヨーロッパの古い静かな国に行くか、ゆっくりと3年間研究に没頭できたアメリカに再び戻るしかないような気分を襲われはじめていた。運悪くか、運よくか、娘も息子も既に日本を離れていて「ゆっくり出来ない日本を出たら……」と言っていた。大学紛争の時代にさんざん嫌な思いをしたらしい子供らは、そのまま大人になっていた。つくづく疲れたなと感じはじめた頃、説明に苦しむ巡りあわせで医学部長に選出される運命となった。昭和63年（1988年）の夏であった。その春には青函トンネルが完成し、80年つづいた連絡船が最後の汽笛を鳴らし、続いて瀬戸大橋が出来て本州

と四国が結ばれた。ソウル・オリンピックの年でもあり、世は活気があると言うか……落ちつかない時代が始まった。

さて私は昭和63年、64年、平成1年、平成2年と医学部長の任にあったが実は1期、丸2年を勤めただけである。任期の半ばに昭和天皇が87歳で崩御し、世が昭和から平成へ変わったので昭和64年は1月7日で終わり後は平成1年となったのである。竹下登総理大臣の時代で、ときの小淵恵三官房長官が「平成」と書いた色紙をテレビで掲げたのを覚えている人もあると思う。医学部長としては珍しい時代経験で、暇が豊富にある大学はまったく消え失せていた。

昭和から平成の時代へ

医学部長に着任して間もない昭和63年（1988年）9月下旬、昭和天皇が病に臥され、やがて見舞いの意を表明するための記名簿が回されて来たがその冒頭に署名することには何故か消極的であった。その年も暮れかかった頃、1987年のノーベル医学・生理学賞受賞者の利根川進博士が来られた。1年間であったか非常勤講師を勤められるとの挨拶であった。お願いしたところ別に深いことも聞かれずに署名して下さった。次の行に私は名を書いて妙に落ちついたが、数分の間に他にどの様な話をしたかは記憶に無い。この様な記名簿が何処から発せられ、その後どの様に処理されたかの説明は聞けなかった。

新年を迎えてすぐ昭和が終わり平成の時代が始まった。当時の文部省、千葉大学本部からの命であろうが医学部でも正門の左右に弔旗を掲げるように指示された。弔旗に異論はなかったが7日間継続することは正月にそぐわないように思ったので3日間にするように言ったが事務当局としては困惑顔であった。「後の日時は医学部長の机上に私の誠意を込めてそれなりの大きさの弔旗を置くこと」として了解してもらった。

平成になって最初の医学部教授会を司会することは流石に心重いものがあった。規定や礼儀に外れないようにやや通り一遍の固い言葉を連ねた後に自作の一句を添えさせて貰った。実は医学を学ぶ前に既

に俳句の修行を始めていたが、ささやかな俳人の一人であることを口外することには消極的で、自作の俳句を句会以外の場所で明らかにすることはなかった。その日に口にさせてもらった句は『笹鳴や涙の意味を問ふなかれ（さとし）』であった。季語の笹鳴（ささなき）とは冬の鶯の吟きのようなもの……鶯は冬期は藪や大きな庭の片隅の茂みなどをかい潜り、低く稚拙な声で鳴きながら枝移りをする。昭和天皇の崩御に遇って国の将来を篤く禱った人、戦争ではからずも失った肉親、親友、先輩、後輩……その他数々の悲しみに涙を止めえなかった人々、私自身もそれらの中の一人であると思うと限りなく複雑な気持ちであった。昭和天皇に対する弔意の表し方は各人に任せ、それぞれの涙の背景を問うて掘り起こすことはしない方がよいと厳しく考えた私であった。

医学部長時代のことを書いてほしいという本誌の編集委員長の連絡を受けた時、そしてその後も今日まで体調その他の条件整わず、果してまともに思い出が辿れてそれなりの文章が書けるかと危惧し続けてきた。しかし昭和から平成へ変わった期間の雰囲気は、筆力及ばなくても何か残しておくべきかと思って拙文をしたためた。筆進める間にあれこれと蘇った記憶もあるが、記念誌に相応しいか否かの吟味も必要であり、今後の何かの機会に備えて備忘録の隅に留めて置くことにした。

沖は青し

昭和45年（1970年）11月25日に私は教授の辞令を受けたが、それは三島由紀夫が悲壮な最期を遂げた日であった。まさに大学紛争の最中であり、教授会は大学外の臨時の会議場を回ごとに移動して開催され、医学部の会議室の教授の椅子に座れたのは年明けてかなり日数が経ってからであった。それから20年近く経過しているのに医学部長の責務を負ってみると、細部にさまざまな不備や回復できないと思われる矛盾も放置されていた。「あれは意味ある空騒ぎであった」と書き残して世を去った評論家がい

た。かつての学生運動の闘士の一人であったが「意味があれば空ではなく、空騒ぎであったなら意味は極めて薄いのではないか」と聞きただしてみなかった。大学が静かに変質したのであれば彼の人々の目的は達成されたのかも知れない。私は作句の仕事もあったので時間があれば学内を歩いていたが、医学部長としても月に一度は庶務係の人を誘って歩いた。大学としての抒情が消失した感が濃かった。安価な少女趣味でもよい、小さな花咲く小径を通し、昼休みにコーラスが聞こえる丘を作りたい等と思った。荒れた中庭に安いクローバーの種を蒔いて花盛りとしたら、子供たちが集まって白い花の冠を作って喜んでいて。しかし年々衰えてその地には今では立派な医薬系の大学院の研究棟が聳えている。苦心して整えた自然の谷には便利な駐車場が出来、恐らく私しか覚えていないと思われる医科大学第1回卒業生の記念植樹のヒマラヤ杉は毎日自動車の排煙をかぶっている。

あの「方丈記」のごとく、うつろいゆく時代は止むを得ないと思いはするが、医学部は他の学部と自ずから異なる本質を秘めた教育機関であることを絶えず深く、永く考えなければならないと思う。平成の時代へ変わった年（1989年）の6月に中国では天安門事件が起こり、日本では時代を画した有名な漫画家が、また国民的な女性歌手が他界した。そして秋、ベルリンの壁が消えていわゆる冷戦時代に幕が引かれたが、思えば資本主義経済動揺の始まりでもあった。私事ながら初冬に私は妻を亡くし、次の年に疲労と困惑のうちに医学部長の任期を終えた。それから1年半ほど経た平成4年（1992年）に私は定年により千葉大学を去った。はじめて長年の肩の荷を下ろしたような、また行方知らずの船に乗ったような、呆然とした気持ちで九十九里浜を歩いた春の日を思い出す。しかし、岬の青空の下で鳴く昼蛙を耳にしながら、まだ何かに希望を抱いていた。沖は青かった。『昼蛙水平線のきれいな日（さとし）』（2010年春 記）

（むらやま さとし）

（元医学部長：昭和63―平成2年）